

井上道義 今しか振れない曲を

自分の心が求めるものしか演奏しない。井上道義はそう断言し、コロナ禍の楽壇を代役で奔走しつつ、妥協のないプログラムを編み、円熟の境地を切り開き続ける。現在75歳。やりたいことをやり尽くし、2024年末で引退する。そんな明快なビジョンが充実した高濃度の演奏の礎となっている。



2024年引退へ まず今月はマーラー

「一世一代の演目」やりきる覚悟

対極的な二つの楽曲に挑む。

今月は読売日本交響楽団とマーラーの「大地の歌」に。そして来月は東京フィルハーモニー交響楽団と、クセナキスのピアノ協奏曲第3番「ケクロプス」を日本初演する。マーラーはひとつひとつの音符に自らの命を刻印したが、建築家でもあったクセナキスは、設計図さながらに音像のイメージを縦横に描き、個々の演奏者のオリジナリティの在りかを問いかけた。

「大地の歌」は李白らの唐詩に基づき、テノールとアルトが歌いかわす歌曲の体裁で書かれている。長女を亡くし、自らも病を患っていたマーラーの、最期の絶唱のような傑作だ。

「精神的にも体力的にも本当にエネルギーが求められる。でも、若かった頃にはできなかった

たことが、今の僕ならできると思うし、一方で、もう二度と振れないとも思う」。一緒に演奏するシベリウスの傑作、交響曲第7番も「僕は、シベリウスの『大地の歌』だと思ってるから。一世一代のプログラム。絶対にはいい演奏を残したい」。

生誕100年のクセナキスは「クラシックの形式や流儀を知らない人たちにこそ届けたい」という。メロディーやハーモニーの移ろいを「聴く」のではなく、音圧や響きの渦をどこかアトラクシヨンの的に「体感する」音楽であり、幼い頃のプリミティブな感覚を呼び覚ます力を持つ。アカデミズムの系譜から一線を画すそのありようは、井上が敬愛してやまない伊福部昭の精神をもどこか彷彿させる。

「ものすごく難しいけど、やってみるととにかく面白い。理屈じゃなくて肉体的に。これはCDとかじゃ伝わらない、広げられない楽しさなんだよね。子供たちにこそ、ぜひ聴いてもらいたい」。コロナ禍で自身も何度か公演中止の憂き目に遭ってきた。だからこそ、一期一会を強く体感させる音楽への思いをかつてなく強く抱くという。来年「のどにずっとひっかかっていた骨を抜く」ような気持ち

ちで、10年かけて書きあげたオペラを初演する。40代前半で、父親が本当の父親ではないことを知らされた。その現実を心の底から受け入れるには、今は亡き両親の人生を音楽で描くしかなかったという。人生を懸けて問うてきた「平和とは何か」という問いにも、このオペラでひとつの答えを出すつもりだ。

咽頭がんを克服したが、合唱などの指導のために大きな声を出すのはいまだに辛い。年を重ね、本当にやりたい演奏を現でできなくなる前に指揮台を降りたい、との思いも強い。

「ヨボヨボと指揮台に立ち、それでもみんなに氣遣われ、立派だなんて褒められる。そんな自分は僕自身が見たくない」。やりたいことはもうやりきった。3年先に見据える引退の時にそう思えるよう、一日一日、やりたい音楽に全身全霊を傾ける日々を積み重ねている。

読響公演は28日、東京芸術劇場。独唱は池田香織と宮里直樹。☎0570・010・296。東京フィル公演は2月24日東京オペラシティ、25日サントリーホール、27日オーチャードホールで。ピアノは大井浩明。☎03・5353・9522。

(編集委員・吉田純子)

シック音楽

ーション・フォ
ン&テナー・サ
崎良子、竹内直
HIN'COOL)
ガン奏者が聖路
の礼拝堂のオル
ナーサクスト
ーション・コル
兆む。重低音が
興が絡み合う。
悦境。(矢)

ト：ホルン協
地宗、鈴木秀
ONTEC) =
ぐ鈴木胸を
首席奏者のモ
狩りの楽
ホルンの魅力
出した。そ
穏やかな歓
る。昨年7
(諸)

ーン：交響
番「スコッ
ウスゴー
っばい、
ブルズゾー
15歳の時
生きとし
い。第3
描写的な
地の風景
(金)